

格安にて再募集!!

平成16年度 親子ふるさとツアーのご案内

前号の「深浦会東京だより」にてご案内させて頂きましたが、今般、参加対象者を高校生まで広げ、尚、参加費用を大幅に安く(各5,000円減)、致しましたので、これを機会にぜひとも親子で、ふるさと深浦町の自然・名所等の体験をして頂きたいと思ひます。きっとすばらしい思い出となることでしょう。

平成16年度親子ふるさとツアー

1. 期 日 10月9日(土)~10月11日(月)(2泊3日)
2. 募集人員 14名(親子とも)
*引率者1~2名(予定)
3. 対象者 小・中学生、高校生
4. 予定行事
 - ・魚釣り大会
 - ・海はたる 観察
 - ・十二湖大崩山 ハイキング (5時間程度)
 - ・ふかうら文学館
 - ・立ちねぶたの館 見学
5. 宿泊場所 ウェスパ椿山
6. 交通機関 航空機
7. 参加費用 小・中学生・高校生20,000円、大人25,000円
*交通費、宿泊代、食事代、旅行保険料込
8. 申込方法 9月10日までに事務局へご連絡下さい。
*尚、先着順にて定員になり次第、締め切ります。
9. 申込先 〒154-0011 東京都世田谷区上馬4-23-7
トボス駒沢102
深浦会東京事務局 TEL03(3418)0914
/FAX03(3422)0483
10. その他 常時、深浦会役員及び町担当者が付添いお世話いたします。詳しい予定等は、後日、参加者にご連絡いたします。

事務局からです

1. 平成17年度総会・交流会

来年は、9月以降の開催を予定しております。日程が決まりましたら、次回の「深浦会東京だより」でご案内致します。

2. 「広報ふかうら」購読申し込みご希望の方へ

深浦町で毎月発行しております。ふるさとの情報がいっぱい会員には大好評です。ひきつづき購読希望する方、新規購読希望の方は事務局までお申込み下さい。

3. 投稿のお願い

「深浦会東京だより」への投稿を募集しております。内容は一切問いません。投稿ご希望の方大歓迎。活字数……600字位、写真を添えて下さい。事務局迄ご郵送下さい。投稿を頂いた方には、テレホンカード(深浦の風景)を贈呈いたします。

4. 住所変更、姓名が変わった方は忘れずに事務局迄連絡してください

5. 名簿提出のお願い

当会では、町出身者にできるだけ沢山ふるさとのたよりを届けるべく努力しておりますが、まだまだ、名簿もれの方が多数おられるようです。同期会、同窓会等の名簿をお持ちの方は事務局迄ご連絡いただきたくお願い申し上げます。

6. 会報への「広告」を募集しています

ご希望の方は事務局迄ご連絡ください。

十年の「ご支援に 感謝して 黒滝 進

平成六年、「深浦会東京」第二回総会で、会長に推されて九十年が経ちました。深浦と東京の「虹の架橋」にこの思いでお引受けしたので、虹は深浦と東京の両極が七色でなければなりません。東京だけの懐かしさや喜びの享受でなく、深浦にも有用でなければなりません。「ふるさと会」をどう捉え、運営して行くかは私にとって課題でした。殊に平成四年の設立総会に四百名もの参加者を集めたマツマの噴出の如き状況に、強い衝撃すら感じたからです。

しかし、一般的には事の性質として、これら一時的熱気は、冷め易い傾向をもちます。そこで、この熱気を冷めさせてはいけないとの強い思いにかられたのです。

まず、東京では、誰もが抱く愛郷心、故郷への思い、それを胸に秘めながらも、普段は億劫さが先行し、放置されがちになります。そこで、この眠る意識に目を醒まして貰い、ほんの少しの行動につなげて貰うことが大切だと考えました。そのため、名簿の整理や、会報を発行し、コミュニケーションを広く且つ深める手段を採ることになりました。

一方、深浦では、平沢町長がふるさと会の有力な提案者で、実現に尽力された先覚者でした。設立後も積極的な協力とご支援を頂いてきました。私たちが、現今がネット社会にあるとはいえ、故郷と中央との交流は依然必要で、特にふるさと人との交流は本質的なものだと考えています。地方は一次産業の衰退と過疎化が進行し、そんな中でも自立が叫ばれ、私たちが出身者にとっても、私たちが行く末は大きな関心事です。一次産業に再生、観光の隆盛を願う立場から、広範な人的交流は重要なファンダメンタルズだとすら考えてきました。

また、人生80年時代に入って、故郷との関わり方も、大きく変貌してきています。かつては、こちらが40代で親を亡くすることにより、総じて故郷との関係が稀薄になる時期は早かった。それが近年は、定年前後に故郷の親の面倒を見なければならぬ。今や50、60代

が、最も頻りに故郷と交流し、帰郷頻度を高め、生涯で最もふるさとが近い存在になっていきます。ここには、行政と遠隔地扶養者との緊密な関係を要する現実があります。「ふるさと会」を巡る双方の思いや、願いを実現する鍵は、交流の裾野の拡がりである。広範な交流が双方にとって、大きな「欲び」と「力」になる。私はそう信じてふるさと会と向い合っていました。

いずれにしましてもこの十年、深浦・東京の多くの人の、心からのご協力とご支援をもって、拙い私を導いて頂き、五十年の任期を終えることができました。この場をお借りし、深甚なる謝意を表します。

併せて、新会長に就任頂いた小野秋夫会長にも、より一層のご支援を賜りますようお願いし、会長辞任のご挨拶と致します。

◆連載◆

深浦の歴史 最終回 今甦える中世戦国の深浦

森山嘉蔵

② 深浦大館址(御仮屋公園)

十三湊安藤氏の北世界交易が全盛の十四世紀中頃から十五世紀中葉の室町時代、安藤宗季系の師季・法季・盛季・康季の凡そ百年は、北方蝦夷ヶ島に向い、また加賀・越前・若狭の上方に登る北国船の風待ちで、吹浦湊(深浦)は船と人で活気に満ちていたと考えられる。この船舶の航行と湊泊に出入する人、財の安全を守護し、その為の帆別銭(船賃)を納めさせ、湊と街、人を統治する城館が築造された。蒼海と湊・街を一望する丘陵に築かれた「深浦大館」である。

字岡町の「大館」は、尾ノ上山丘陵の先端部(舌状地)を利用した標高七十五メートルの地に、南北百八メートル・東西百四十六メートルの城郭で、周囲を五尺の土塁で固めた戦斗の為の詰城の築造ではあるが、日常的には視海と統治の政庁としての「深浦大館」と考えるのである。

その頃の城館主は十三湊安藤氏の一族か、その麾下の部将と思われるが不詳である。

嘉吉三年(一四四三)、南部義政の猛攻に安藤康季は一族と共に蝦夷ヶ島に撤退し、津軽は三戸南部領となった。惣領家の本拠地を奪取された深浦安藤氏は、やがて南部勢の圧力に抗し切れず小島・秋田に去った後、出羽河北地域の蟠踞する葛西氏の系類である葛西木庭袋伊予守頼清の支配する所となった。永正初期(一五〇四)から天正初期(一五七三)の七十余年間は、頼清・清順・信清の三代にわたっているようである。

信清は、天正年間大浦為信麾下の部将である千葉弾正に攻められて敗走し、深浦領は大浦氏の所領となつて、その麾下の部将が城代となつていくのである。千葉弾正の後には千田与次右衛門清元、小山内内匠・同長助と続いて、元和元年(一六一五)の一國一城令によって破城となつた。

③ 元城館址

字浜町を流れる磯崎川を五百メートル程遡り、支流の湯ノ沢と芒ノ沢に挟まれた舌状台地に築造され、県道中山街道の左側に屹立している。城址は標高四十五メートルから六十五メートルで、南北約二百五十五メートル・東西約百二十五メートルである。北側が二の郭(副郭)で南北八十八メートル・東西八十メートルとなり、南側が一の郭(主郭)で南北八十メートル・東西が百メートルと面積がやや広い。この主郭の南には、舌状台地四十五メートルを五本に堀切った空堀りがあり、後背丘陵を切断している。主郭と副郭の間には幅十メートル程の帯状の窪地があるが、空堀の址と思われる。城郭の東側と北側は急崖で、西側には数段の

帯曲輪や腰曲輪があり、南側は前述のように、丘陵基部を断ち切った五本・四十五メートルの空堀となつている。城郭築造の時期として考えられるのは、室町後期の享徳三年(一四五四)、故地津軽奪回の執念に燃える安藤義季が、蝦夷ヶ島から西浜に渡海し、岩木山麓の大浦郷に狼之倉館を築造して「打倒南部」の兵を挙げたが、六千の南部勢に攻められて頭領義季は討死した。生き残った二百の安藤勢は、白神連山の山なみを伝って追良瀬から深浦に辿り着き、「深浦館」を築いて南部軍勢の攻略に備えた。と「新羅之記録」にあるが、元城址がその「深浦館」と思われる。この深浦館を、戦国末期の頃、秋田安東氏の攻撃に備えて大浦(津軽)氏が堅固に再構築したのが、現在残っている「元城址」と考えられる。

④ 有間館(吾妻館)

深浦大館の北東約六百メートル、吾妻坂を登る左側で、海岸から凡そ三百メートルの丘陵上に位置している。南北約二百メートル、東西約二十メートルも舌状台地の堀切りと空堀で三郭に区切られている。東西北側が急崖で天然の要害である。築造は、深浦大館の出城として同時期と思われる。

三城館址の今後の発掘調査が望まれる。

完